

不登校経験者の大学への適応について¹⁾

The Effects of the Prior School Non-Attendance on Adaptation to Campus Life.

興津真理子・水野邦夫・吉川栄子・高橋 宗
OKITSU Mariko, MIDZUNO Kunio, YOSHIKAWA Eiko, & TAKAHASHI Shu

(聖泉大学人間学部人間心理学科)

要 約

本研究では不登校経験者の大学への適応について、心理的側面から検討することを目的とした。研究1では、以前に不登校を経験した学生とそうでない学生との比較を通し、不登校経験に影響すると考えられる要因を調べるとともに、大学での適応に必要と考えられる要因について検討することを目的とした。次に研究2では、本学で1年次に行なっている構成的グループエンカウンターを導入した授業での他者との交流を、不登校経験者がどのように捉えているのかを検討し、こうしたプログラムが不登校経験者の適応への一助となりうるのかを吟味することを目的とした。その結果、研究1においては、不登校経験者は対人関係の煩わしさが引き金となって学校が嫌になるものの、煩わしさが孤独感や不信感と結びつくことで、最終的に不登校に至る(未経験者は煩わしさを感じても、人間関係のつながりまでは失わない)ことが示唆され、不登校経験者の大学への適応を考える際には、大学生活の中で人間関係のつながりの重要性を実感させる場面を作っていくことが求められると考えられた。また、構成的グループエンカウンターは、そうした場面となりうるものであるが、研究2において、この他者との交流が、不登校経験者にとっても過大な負担にならずに取り組めるものであることが示された。実施による心理過程の詳細については今後検討し、必要な配慮を明らかにしていく必要がある。

Key Words: 不登校経験, 自己・他者観, 構成的グループエンカウンター (S G E), 大学への適応

註: 1) 本研究は、日本心理学会第70回大会(平成18年11月3～5日開催, 於九州大学)において報告を行なった。

目 的

不登校経験者にとって、その後においても人づきあいは大きな課題と感じられるようである。たとえば、森田（2003）による追跡調査で、不登校経験者に現在の課題をたずねたところ、人づきあいを選択したものが41.1%と最も多かった。また、われわれは不登校経験者の自己・他者観についての検討から、回復過程と対人関係との関連について考察してきた（興津・水野・吉川・高橋，2005）。すなわち、不登校からの回復過程には、1）自己受容・自尊心の回復、2）自他への信頼感の回復、3）現実の対人関係の回復という3段階があり、不登校経験者のうち、大学進学後も学校嫌い感情が高い者は、第1の段階にいるが、不登校経験があるが現在は学校嫌い感情が高くない者は第2、もしくは第3段階にいるのではないかと考えている。このように、対人関係は不登校のきっかけにもなりうるものではあるが、一方で回復過程においても、立ち足かる壁となりうる重要な課題なのである。

ところで、不登校経験者の大学進学率は、一般的な大学進学率よりも低い。森田（2003）の報告では、平成5年度末中学校卒業者に関して、学校基本調査では大学・短大への進学が40.7%であるのに対して、不登校経験者は大学・短大12.9%だった。しかし近年、大学をめぐる状況は大きく変わってきており、全入時代、ユニバーサル・アクセスの時代と言われるようになってきている。不登校経験者がさまざまな課題を持ち越したまま大学進学することも、以前と比較すると多くなっていると考えられる。その場合、大学で対人関係の問題に改めて取り組まねばならない者もでてくるため、大学においても不登校経験者への支援を考える必要が増大しているといえよう。

そこで、本研究では不登校経験者の大学への適応について、心理的側面から検討することを目的とした。研究1では、以前に不登校を経験した学生とそうでない学生との比較を通し、不登校経験に影響すると考えられる要因を調べるとともに、大学での適応に必要と考えられる要因について検討することを目的とした。次に研究2では、本学で1年次に行なっている構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter, 以下SGEと記す）を導

入した授業での他者との交流を不登校経験者がどのように捉えているのかを検討し、こうしたプログラムが不登校経験者の適応への一助となりうるのかを吟味することを目的とした。

研究 1

方 法

被調査者 大学生161名（男子108名，女子53名）に対し，下記調査票への回答を求めた。

調査票 調査にあたり，①古市（1991）の学校嫌い感情測定尺度（ただし，大学生への質問項目としては不適切と思われる「今のクラスはよくないので，ほかのクラスに変わりたい」を除いた11項目），②山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（10項目），③興津・水野・上西・吉川・高橋（2003）の自己受容尺度（5項目），④天貝（1995）の信頼感尺度（自分への信頼（6項目），他人への信頼（8項目），不信（10項目）），⑤工藤・西川（1983）の改訂版 UCLA孤独感尺度（20項目），⑥広沢・田中（1984）の異なった関係における孤独感尺度（ただし，友人関係孤独感に関する10項目のみ），⑦杉田（1990）のエゴグラムAC尺度（10項目），の各項目について，いずれも5段階で回答させる問と，過去の不登校経験などを回答させる問などを含んだ調査票を作成した。

手続き 調査は3年にわたって実施し，各年の1回生に対し，7月中旬から下旬ごろに行った。授業時間の一部を利用し，調査票を配付し，回答を求め，後日所定の場所に提出するか授業終了後に持参するように指示した。

結 果

上記7つの尺度は，相互相関も高かったため，②③④の「自分への信頼」，④の「他者への信頼」「不信」，⑤⑥はそれぞれ，合計点を算出し，それぞれ「自己受容」「対人不信」「孤独感」の指標とした（対人不信は対人への信頼尺度項目を逆転項目とした）。他の尺度はそのまま「学校嫌い感情」，「Adapted

Child (AC) 」の指標とした。また、欠損値のあるデータについては、分析の都度に除外した。

不登校経験の有無と各指標の差について 上の各指標について、不登校経験あり群となし群での平均値の差を検定するために t 検定を行った。その結果を表1に示す。表1からわかるように、有意な差もしくはその傾向がみられたのは対人不信、AC、学校嫌い感情であり、いずれも不登校経験あり群の方が値が高かった。一方、社会的場面での適応に大きく関連すると考えられる自己受容や孤独感については有意な差は認められなかった。

表1 不登校経験の有無と各指標の平均と t 検定の結果

指標	不登校経験		t (df)	p
	あり ($N=36$)	なし ($N=125$)		
学校嫌い感情	29.00	25.90	1.73 (158)	+
自己受容	63.14	64.62		
対人不信	54.17	48.24	2.70 (159)	**
孤独感	78.00	73.67		
AC	36.92	33.73	2.10 (159)	*

註：** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

不登校経験の有無による各指標の捉え方について 次に、不登校経験の有無により、上記の指標の捉え方にどのような違いがみられるかを調べるために、経験の有無ごとに、これらの指標について因子分析（主成分法、Varimax回転）を行った。なお、Kaiser-Guttman基準ではいずれも1因子（説明率は各53.8%および56.6%）であったため、2因子に指定して分析を行った（累積説明率は各70.0%、70.9%）。それぞれについて因子負荷量を2次元上に

布置したものを図1, 図2に示す。図からわかるように, 各群とも指標の布置は大体同様であるが, 学校嫌い感情については, あり群では孤独感との結びつきが強いのに対し, なし群ではACとの結びつきが強いと考えられる。

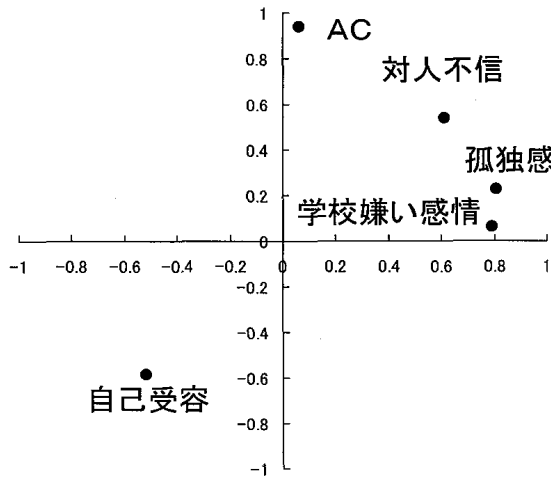


図1 不登校経験あり群における各指標の因子負荷量

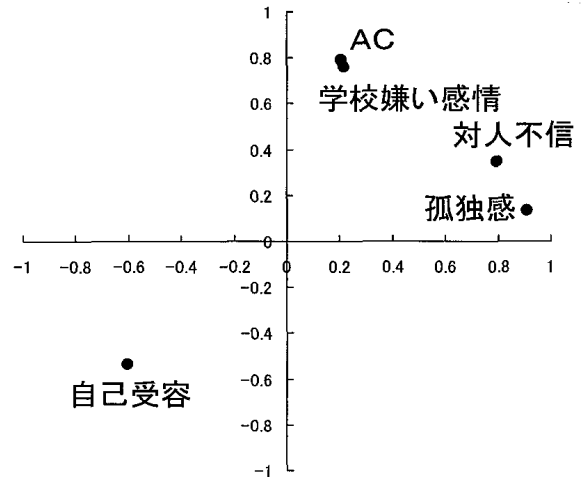


図2 不登校経験なし群における各指標の因子負荷量

考 察

不登校経験者は未経験者よりも対人不信やACが高いという結果が得られたが, 彼ら是对人的な葛藤が強く, 他人への不信感が強いことで, 学級集団に馴染みにくくなり, 不登校になりやすかったのではないかと考えられる。その一方で, 彼らは未経験者と比べて自己受容や孤独感に差がみられなかったことから, 必ずしも自己卑下的ではないと考えられる。これらのことから, 不登校は, 本人の自己評価の低さ (自信のなさ) よりも, 対人関係におけるさまざまな軋轢が原因となって生じやすいのではないかと考えられる。ただし, 本調査における不登校経験者は, 高校までの間に不登校を克服し, 大学に通学できているものがほとんどであり, 不登校の克服には自己肯定感や適度な連帯感 (「ひとりでない」という感覚) が必要であるといえよう。

次に, 不登校経験の有無で, 学校嫌い感情の特徴を比較したところ, 不登校経験者は孤独感と, 未経験者はACとの結びつきが強いという結果になっているが, このことからまず, 学校嫌いは対人関係の問題から生じると考え

られる。しかし、未経験者は他者に気を使う煩わしさ（無理をしながら人間関係を続けなければならないことなど）から学校嫌いになるのに対し、経験者は煩わしさから逃れた後の孤独感や人間不信から学校嫌いになると考えられる。すなわち、学校内の人間関係に気を使いすぎ、それが他人に対する不信感や孤独感へと発展した場合に、不登校につながっていくのかもしれない。ここで、不登校が学校嫌い感情によって生じると仮定すると、対人関係の煩わしさが引き金となって学校が嫌になるものの、煩わしさが孤独感や不信感と結びつくことで、最終的に不登校に至る（未経験者は煩わしさを感じても、人間関係のつながりまでは失わない）と考えることもできよう。よって、不登校経験者の大学への適応を考える際には、大学生活の中で人間関係のつながりの重要性を実感させる場面を作っていくことが求められるといえよう。

研究 2

方 法

被調査者 聖泉大学でSGEを中心に行う演習を受講した学生を調査対象とした。中国人留学生15名を含む81名が授業登録した。なお、これらの被調査者は研究1のその一部でもある。

エクササイズ 被調査者は3グループに分けられ、4週（ただし週1回ずつの90分授業）で1セットのSGEのエクササイズを取り入れた授業を受けた。4週の授業を終えると、次の4週は別の担当教員のもとで、同様にエクササイズを中心とした授業を受けた。さらに次の4週は、また別の担当教員のもとで同様に授業を受けた。なお、どのグループもはじめの4週は、インタビューや相方紹介などを通して他者とコミュニケーションをとるエクササイズを、次の4週では、グループワークを中心としたエクササイズを、最後の4週では、自分の内面を意識させることを目的としたエクササイズをそれぞれ行った。

調査票 SGEを受けて感じたこと、また自己に対する認知の程度を調べるために質問紙を作成した（表2参照）。質問紙は2つの部門からなり、1つ

はSGEを受けて感じたことなどを尋ねる問題（「あなたは、メンバーの人たちに自分の気持ちを素直に表現することができたと思いますか」、「グループやペアで話をする時に緊張しましたか」など計12項目）、もう1つは林（1976,1979ほか）の特性形容詞尺度（計20項目）の各形容詞対項目について、自分自身がどれくらいあてはまるかを回答させるものであった。なお、過去の不登校経験については研究1のデータを用いた。

表2 SGEで感じたことに関する質問項目

SGEについて			
1.	あなたは、メンバーの人たちに自分の気持ちを素直に表現することができたと思いますか？		
2.	この授業以外で留学生と話をする機会が増えましたか？		
3.	他のメンバーの意見を聞いて、「自分もそう思う」と納得したことはありましたか？		
4.	グループやペアで話をするときに緊張しましたか？		
5.	グループやペアで話をしている、他人の意見に違和感を感じることはありましたか？		
6.	他のメンバーたちは自分の気持ちを素直に表現していたと思いますか？		
7.	メンバーの人たちに親しみを感じましたか？		
8.	あなたは、留学生のことをもっと知りたいと思うようになりましたか？		
9.	自分のことを話すときに、恥ずかしさを感じたりしましたか？		
10.	これまでの授業を通じて、自分の新たな一面を発見することができたと思いますか？		
11.	あなたは授業に楽しく参加できたと思いますか？		
12.	この授業がきっかけで新しい友達ができましたか？		
特性形容詞尺度			
1	積極的な	—	消極的な
2	人のわるい	—	人のよい
3	なまいきでない	—	なまいきな
4	人なつっこい	—	近づきがたい
5	にくらしい	—	かわいらしい
6	心のひろい	—	心のせまい
7	非社交的な	—	社交的な
8	責任感のある	—	責任感の無い
9	そそっかしい	—	慎重な
10	恥知らずの	—	恥ずかしがりの
11	重々しい	—	軽薄な
12	沈んだ	—	うきうきした
13	堂々とした	—	卑屈な
14	感じのわるい	—	感じのよい
15	分別のある	—	無分別な
16	親しみやすい	—	親しみにくい
17	無気力な	—	意欲的な
18	自信のない	—	自信のある
19	気長な	—	短気な
20	不親切な	—	親切な

手続き 被調査者には、3回にわたり、SGEに関する質問紙を配布し、回答を求めた。調査は4週の授業が終わった翌週（すなわち、次の担当教員へ移動した第1週目）の授業開始時に行なった。3回目の調査については、翌週に全体ガイダンスの時間を設けたので、その開始時に行なった。また、そ

の際に不登校経験などについての調査も実施した。質問紙は回答が終わりしだいその場で回収した。

結 果

分析に際しては、日本人学生のデータのみを対象とし、SGE質問紙と学校嫌い感情についての質問紙の両方に回答した57名を分析対象とした（男性31名、女性26名、うち不登校経験者11名）。

SGEで感じたことに関する質問項目について、不登校経験の有無を被験者間要因、調査時期を被験者内要因とする2要因の分散分析をおこなった。その結果、不登校経験要因が有意だったのは、図3に示した項目9「自分のことを話すときに恥ずかしさを感じた」における主効果のみであった（ $F(1,55) = 5.88, p < .05$ ）。不登校経験者はそうでない者よりも自分のことを話すときに恥ずかしさを感じていたことが明らかになった。

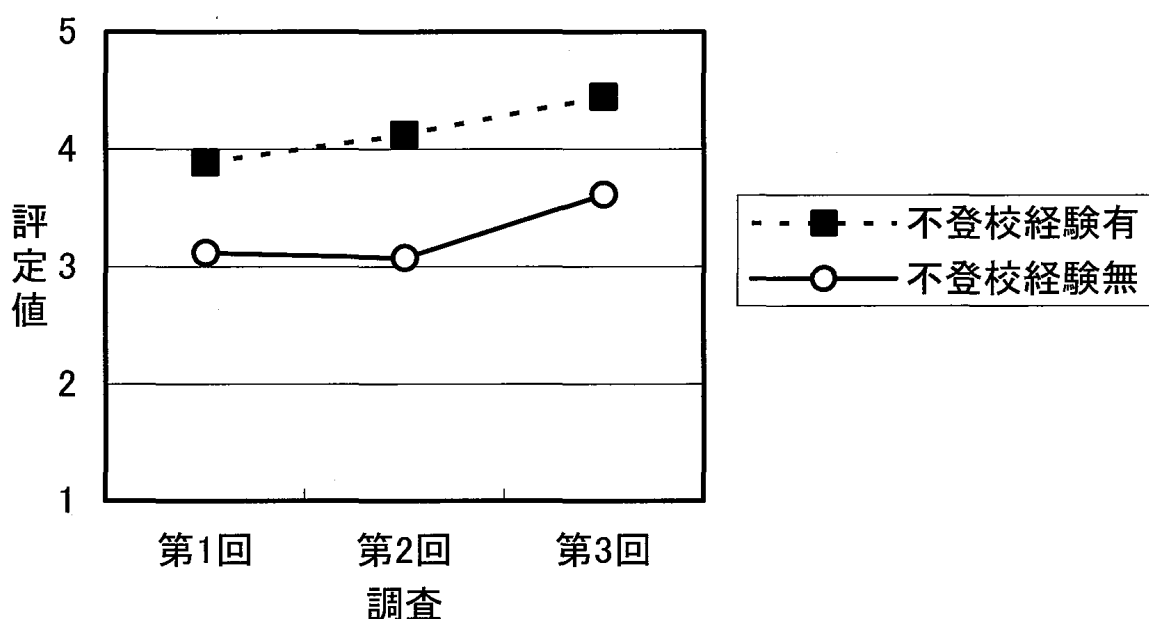


図3 自分のことを話すときに恥ずかしさを感じた

また、特性形容詞尺度についても同様の分散分析を行った。その結果、「そっかしい－慎重な」（ $F(1,55) = 8.60, p < .01$ ）、「重々しい－軽薄な」（ $F(1,55) = 6.33, p < .01$ ）、「自信のない－自信のある」（ $F(1,55) = 6.20,$

$p<.05$) において、不登校経験の主効果のみ有意であり、不登校経験者は経験のない者に比べて、「慎重」、「重々しい」、「自信のない」、といった形容詞が自分に当てはまると感じていた。

さらに、「沈んだーうきうきした」においては、不登校経験と調査時期の交互作用が有意であった ($F(2,94) = 3.74, p < .05$)。図4より、第1回調査では不登校経験の無い者が「沈んだ」寄りであったのが、第3回では不登校経験群の方が「沈んだ」寄りになっていた。

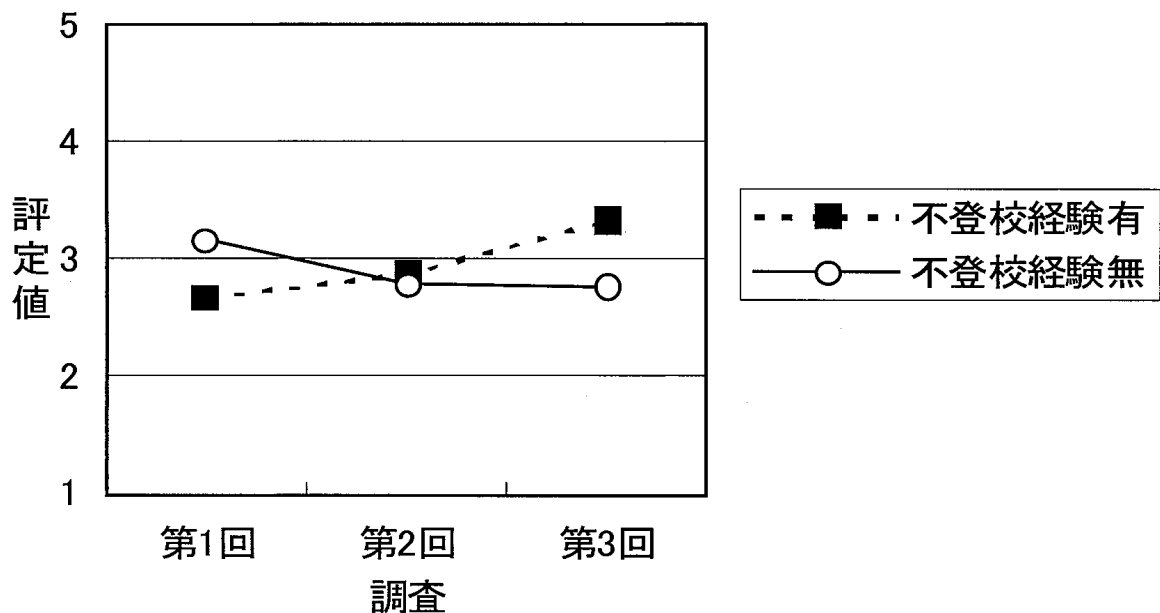


図4 沈んだ(5点)ーうきうきした(1点)

考 察

SGEで感じたことに関して、不登校経験者が自分のことを話すのは恥ずかしいと感じることが多かったのは、対人交流に慣れていないことによるものだと考えられる。しかし、それ以外の項目では不登校経験の効果が見出されなかったということは、SGEによる他者との交流が、不登校経験者のみに過大な負担となるわけではないことを示しているといえよう。

次に、不登校経験者が経験のない者に比べて、「慎重」、「重々しい」、「自

信のない」, といった形容詞が自分に当てはまると感じていたという結果に関してであるが, これは, 不登校経験者が対人場面にすぐに馴染んでいくというよりは, 慎重になり, 気楽に人づき合いをできないところがあることを示しているものであろう。

最後に, 「沈んだーうきうきした」に関して, 第1回調査では不登校経験の無い者が「沈んだ」寄りであったのが, 第3回では不登校経験群の方が「沈んだ」寄りになっていたことについてである。これには2つの理由が考えられる。1つは, 第3セットのエクササイズが自己の内面を意識させるエクササイズであったため, それが不登校経験者にとっては負担になったのではないかということである。簡単なコミュニケーション導入のエクササイズにはそれほど抵抗は感じないが, 自己の内面を意識させたり表現させたりするエクササイズは, 恥ずかしさもあり, やや負担になるのかもしれない。今1つは, 回を重ねるにつれて, メンバーの中でも親しい者同士の関係ができていくが, 不登校経験者は, そこに入るのは難しく感じて一歩引いてしまうため, 孤立感を味わっているという可能性である。こうした詳しい心理過程については, 今後インタビューなどで明らかにしていく必要があると思われる。

総合考察

以上に, 不登校経験者の大学への適応について検討してきたが, 研究1では大学生活の中で人間関係のつながりの重要性を実感させる場面を作っていくことが求められることが示唆された。研究2において検討したSGEはこうした人間関係の重要性を実感させる機会となりうるものであろう。不登校経験者にとってもSGEは過大な負担にならずに取り組める交流であることが明らかになった。しかし, プログラムとして形式的に導入してだけでなく, そこでの心理過程に十分配慮していく必要があるだろう。

引用文献

天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学

- 研究, 43, 364-371.
- 古市裕一 1991 小中学生の学校ぎらい感情とその規定因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 広沢俊宗・田中國夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, 49, 179-188.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1) 孤独感尺度の信頼性・妥当性 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 森田洋司 2003 不登校－その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡 教育開発研究所.
- 興津真理子・水野邦夫・上西恵史・吉川栄子・高橋 宗 2003 不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連 聖泉論叢, 11, 27-37.
- 興津真理子・水野邦夫・吉川栄子・高橋 宗 2005 不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連2 聖泉論叢, 13, 39-49.
- 杉田峰康 1990 医師・ナースのための臨床交流分析入門 医師薬出版株式会社
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.